古本屋の戦後

広島・私と古本屋

藤井成一

昭和二十年八月三十日、私は復員して廿日市駅で下車した。

広島駅、横川駅、己斐駅、(何れも広島市内の駅)周辺は幾分焼け残り破壊を免れた建物があった様だがとても下車できる状態では無かった。

一応、田舎に落ち着き、十二月再び広島市に入った時にはもう復興の兆しがあり、各駅の周辺には闇市がひらかれかなりの賑わいであった。その中で古書店は、広島駅では、朝日書房、三国書院、横川駅周辺では、にしや書店外二軒、己斐駅の周辺では、佐々木書店、清水書店、富士書店、外二軒があった。私は翌二十一年三月、己斐駅のマーケットに店を出した。

幸いに、親戚の家に永野　護著「敗戦真相記」自由国民社発行の本が千冊位あった。此れを持ち出して並べたところ、二週間位で売れてしまった。更に親戚より駆り集めた「婦人クラブ」「主婦の友」なども瞬くの間に無くなり、当時の人びとが如何に活字を求めていたかを知った。

七月に入ると広島西警察署より、古物商の組合をつくれとの話があり更に八月には広島市内の古書店が広島市商工会議所に集まり、古物商の組合からはなれ「広島県古書籍組合」を結成し、会長に黙平堂書店を選出し一応の形を整えた。この時集まった同業者の数は約七十人、お互いに顔を見合せてその数の多いのに驚いたものだ。

ついで、戦後第一回の市会を九月に開催する事になり取りあえず、黙平堂書店の裏の小屋を会場にした。集まった業者は約二十数名、何れも若く活気のある人達であった。その後、稲荷町の土手下にあった古物商組合の広間を借り数年の間此処を会場にした。当時国鉄横川駅へ向かう市内電車の終点は別院前電停であった。安佐郡の人々が広島市内に入るには別院前電停まで歩く必要があった。そこで翌二十二年一月、私は横川駅に近い別院前電停の傍に移転した。間口二間、奥行き二間のバラック小屋である。

この頃は哲学書がよく売れ、阿部次郎の「三太郎の日記」・西田幾多郎の「善の研究」等は代表的な物であった。

焼け野が原の広島市の中心地域もぽつぽつ復興し、八丁堀では福屋百貨店を中心に商店街が出来、その中に三国書院、やよい堂書店、アカデミイ書店、山陽書店があり、横川の文蘆書店も加わった。本通りでは南海堂書店が二十一年の八月に開店した。千田町では大学前に大学堂書店、千田書店、春秋書房、神川書店、京橋筋にいた澄江堂書店も千田町に移り黒木書店と改名した。

別院前電停の私も二十四年一月には千田町に移転した。又鷹の橋の商店街には拓文堂書店、エイス書房があった。

昭和二十三年の二月ごろ、三国書院の音頭で即売会をキリンビヤホールの二階で開催した。これが広島に於ける戦後第一回の即売会である。

この年の秋には比治山の多門院を借り戦後第一回の大市会を開いた。この市会は黒木さんが、ある医者の蔵書を一括処分する事になり、此れを中心に各組合員の持ち寄りで開催した(一人二万円の責任額)。京都・大阪の業者にも呼びかけたところ皆さんの参加を得、盛大な市になった。

昭和二十四年六月には神川書店に大口の買い物があり、再び京都、大阪の業者を招き市を開いた。この市で私は英文の塗料便覧を含む化学系洋書一括を落札し、青くなったのである。まったく当てがなく、たまたま入れた札が高値で私に落ちたのである。約二週間かけて目録を作り、中国塗料、広島大学に買って頂いたときにはホッとしたものだ。

昭和二十三年にたまたま私の店に来られた方に、S先生、I先生、M先生、がおられた。S先生は女学校長、I先生は会社社長、M先生は中学校長という人達で、書物に関して何かと御指導を賜った。

この頃は学制の改革があり、又社会教育の観点からも学校図書館だけでなく図書館、公民館等も図書の収集に関心が高まって来たときでもあった。

広島でも中学、高等学校では平凡社の大百科事典や全集もの等、基本図書になる物が売れた。しかし一方新刊書の発行が増加し充実するにつれて古書の販路は狭くなり、広島の古書店は一軒一軒姿を消して行った。

千田町では昭和二十五年に黒木書店が神戸へ転出し、昭和二十七年に私が現在地吉島に移転し、廃業した人もあって、昭和三十五年頃には大学の町と言われた千田町の古本屋は大学堂書店と鷹野橋から移転したエイス書房だけになった。

私は昭和二十三年から三十五年頃迄経営の重点を中学校、高等学校においた。しかし、広島では品物が少なく昭和三十五年頃までは仕入れの大半を神戸、大阪にたよった。神戸の市会にも度々行き、黒木さんのお世話になったのもこの頃で、ある時公民館より大きな注文をうけ、品

物を集め書類を作成し現物を役場に持ち込み書類と突き合わせたところ、一点「俳諧歳時記五冊揃」が抜けていた。簡単に入手出来ると思い一週間の時間を貰って探すことにした。

しかし、当たってみると広島にはなく、この一点を求めて、宇品から松山、今治と歩き、高松でやっと入手して、岡山を通り広島についたのは夜の十二時を過ぎていた。ありふれた書籍一冊でも、いざ探すとなると並大抵でないことを身に沁みて感じたものである。

この頃から私は、これまでの経営の方針に行き詰まりを感じてきた。

田舎の中学校、公民館等は先に触れた新刊出版物の充実と、地元の新刊書店を優先する傾向もあり、古書店の入り込む余地は無くなって来た。

昭和二十八年の十二月のある日、私は八丁堀の金座街で偶然にもS先生にお会いした。先生は広島大学教授になっておられた。一通りの挨拶の後、昔の教科書を集めるようにと申された。翌年の六月、一抱えの教科書(主に国定教科書)を持って広島大学教育学部に行き、S先生にお会いした。数学のT先生もこられ図書館の受入とも話し合い、以後は継続納入と言うことになり、此の仕事は昭和四十五年迄続き、その間教科書について勉強もさせて頂いた。

昭和三十二年の秋十一月のある日、大阪、神戸の帰り広島駅で下車し、一休みのつもりで入った喫茶店に一人の男がいた。彼は私の大きな荷物を見てどう思ったのか話しかけてきた。話しているうち私が古本屋であることを知ると面白い事を話してくれた。彼は製紙原料を扱う大きな問屋の番頭で、Fさんと言った。今日岩国に行き先方の問屋の紙を見てきた。其れは和紙で、紙としては高値で売れるが、昔の事が書かれた帳簿だと言う。

私は息を飲んだ。私は彼を説得するのに必死になった。何分初対面である彼がどう出るかは不明だ、しかも現物を見ない中は何とも言えない。其処で翌日、彼と一緒に岩国迄見に行く約束をした。一時間余りバスに乗って岩国につくと、私は何処をどう歩いたのか、ひたすら彼の後に続いて歩き目的の問屋についた。ソギふき屋根のバラック小屋に、和紙の固まりが詰め込んであった。其処の主人に聞くと、明治の初め生活に困った武士の授産事業としておこした織物会社「義済堂」が廃棄した文書であると言う。

私は即座に当時の社会情勢を知る此の貴重な文書を何とかしなければと思った。そしてFさんに、このままの状態で広島へ運んで貰うことにした。(製紙原料を扱う業者は紙の質を選別するため、直ぐに年代を記入した表紙や文書のなかの別の紙をちぎり取りバラバラにしてしまう)

広島に着いた二トン車一杯のこの文書は、H問屋の二階におさまった。私は早速、県立女子大のお二人の先生にこの文書の話をし、H問屋の二階に案内し現物の文書を見て頂いたのであるが、女子大としては引き取って貰えず次に広島大学に紹介し、文学部、政経学部、教養学部、図書館共同購入と言う事で納入がきまり、H問屋の二階から広大図書館の地下室におさまった。十一月の三十日頃であった。十二月に入ると毎日、大学の図書館の地下に通い書類を作成し総てを済ませたのは十二月の十日頃であった。

因みにこの文書は「広島大学図書館」義済堂文庫(二六一七冊)として特別集書になっており、所定の手続きにより一般の閲覧も出来るとのことである。

(広島大学図書館調べ)

この後、私は広島市郊外「緑井村の文書」を県立図書館へ、中山村の兵事に関する資料を広島市の浅野図書館(広島市立中央図書館)へ、山県郡の文書を、広大学校教育学部へ、納入した。其の内「緑井村文書」は広島県立文書館に保管されているようだ。(広島県立文書館調べ)

昭和三十年を過ぎる頃から広島の古書店は次第に数を減らし、先に触れた様に、千田町は勿論、中央部は金座街・本通りを含めて三国書院・アカデミイ書店・文蘆書店・南海堂書店のみになった。終戦直後、呉市にあった三軒の古書店もいつの間にか姿を消していた。かくて七十軒もあった広島の古書店は七軒に減少したのである。このように寂れた広島の古書店は、最早市会を開く力もなく各自自分の城を守るだけであった。この頃私は、行政資料に関心を持った。官庁や特定の調査機関の発行する資料は其れなりに価値があると思った。そこで東京の資料市会に出て資料物に力を入れることにした。

さて、現在広島の古書店は三十軒を超し、市会に出席する者も二十名にも及び中々の盛況である。これは一誠堂書店に勤めていた金銅幾雄君が昭和三十九年広島に帰り、努力して広島市会の建て直しを図ったからである。

尚、最後にこの度の大震災で大きな被害を被った黒木さんが災害に屈せず、本の整理や古書の買いに活躍されている由を承り、その不屈の精神に敬意を表し、神戸の皆様に心からお見舞い申し上げる次第である。

(広島　椿書房)

第2回徳島古本祭
とくしまCITY古書の市
期間　平成7年5月3日(水)～7日(日)　5日間
営業時間　午前11時～午後8時　7日(日)　午後5時まで
場所　とくしまCITY　5F　シィティスタジオ